

# おはなし二つ

東京女子高師保姆 新庄 よし子

## 猿と玉葱

猿が澤山で一緒に住んで居りました。

大分氣候がよくなつて來たので元氣よく鬼ゴッコや、かくれん坊や、飯事して夢中で遊びまはつて居りました。すると向ふの方から、八百屋のお爺さんが、籠をかついで、

「え、茄子に人蔘、大根に生姜」と云つて歩いて參ります。前と後の籠の中にはとりたての、野菜が、青々として一ぱいあります。猿の大好きな人蔘や、おいも、其の後の方の籠の中から一つころ／＼と、ころがつて地に落ちたものがあります。八百屋はちつとも知らないでズン／＼行つてしまひました。すると一番喰ひしんぼうの猿吉が見つけて。ヒョイとび出して、その落ちたまるいものを拾ひましたので、さあ外のお猿も承知しません。皆夢中でそつちの方へかけて行きました。

「何だ何だ」

「見た事もないものだね」

「ころがして御覽よ」

「ころ／＼ころがるけれど、いつものゴム毬とも違ふ様だね」

「おや／＼皮がむけるよ、だけど一皮むいたが實が出ないよ」

「そんな事あるものかね、もう一つむいてごらん」

「まだ出ない」  
「さあ、何だらう／＼と解らないので、もう大騒ぎです。何しろ食ひしんぼうの集りですからもう中味が食べたくて／＼たまりませぬ。中にはぢれたくなつて横から手を出しておこられて居るものもあります。」

「けれ共むいても／＼皮ばかり、初と同じです。」

「さあ、少し不思議になつて來ました。氣味も悪くなりしました。随分おかしな木の實もあるものだと、其の玉葱を持つたま、お猿さん達はだまつて考へ始めました。」

「どうもおかしいね、いくらむいてもくくみが出ないよ」

「何と云ふ名だか知らないがこんなに澤山着物を着て居るんだから寒いくく北の方の山のお土産かも知れない、そうでなけりや、お爺さんや、お婆さん達に育てられた寒がりの意氣地なしかも知れないよ」

そう云つて今度は皆でつぶし始めました。ところがあの、くさい玉葱の事ですから、さあ大變、皆もう目が痛くてくくたまりません涙をぼろくくこぼして行つてしまひました。

一一、九、二三、作

## 蝸牛

綺麗なお庭に大きな桐の木がありました。或日の事ひよつくりと蝸牛が桐の木のすつと上の方に出了ましたが何しろ有名な足のもろですから、一寸位の道を歩く事も随分大變です、よちくくどそれでも一生懸命に下の方に下りて來ました。蝸牛は雨が大好きです。雨が降れば、大變に元氣になつて少しは早く歩けます、お待かねの雨が降つて來ました。靜かに

靜かに降る雨の日です。もう大喜びグーツと軀を殻のお家からのぼして角や目玉も思ひ切り出して外の景色を眺めて居たら御近所の雨蛙の家で今晚お客をしますから遊びにいらつしやいと云つて來ました。

丁度幸い雨が降つて居るので、いつもより早く木から下りて八ツ手の木のお家に居る雨蛙さんのお家に著きました。色々なお客が居ます。そしてダンスをするのだそうです。丁度來合せたお客の一匹が大變に蝸牛に似て居ます。足がのろくて、軀がぬるくして居て、角や目玉に何かさはるとぢきに引込めます。たっお家だけはしよつて居ません、なめぐじと云ひます。大變よく似て居るので、そこで親類になりました。

外にはいなごや、ばつたや、こほろぎ等も居りました。

蛙は

お池のピョン太郎さんはピョンくく母さんと一緒にピョンくくくく

と云つて一番先に上手に踊ります。皆で拍手いたしました。

蟻は稻の穂を持つて多勢でお米踊りをしました。

こほろぎはそれはくよい聲で思ひがけなく高く飛び乍らハイカラなダンスをしました。

もう皆面白くてく最後に合唱をしました時にはすつかり浮かれて夢中ではねまはりました。

蝸牛もなめくじも自分達は無藝ですが面白くて、角も目玉も軀ものばしきりで引込める事なんかすつかり忘れて居たので、お庭に歸りましてからグツスリ眠つてしまひました。

翌日になり、昨日あんまり面白かつたので又どこかに行つて見度くなりよろ／＼と出かけました、すると、それはきれいな真赤な御殿があります、餘り綺麗なので知らず／＼そのお家の方に参りますと赤い扉があります、それを殻でギユツと押ししますと自然に扉が開いて赤いお室があります、真中には又真赤な衣を着た坊さんが居ました。珍らしいお客なので大變に歓迎して呉れました。ほうづき御殿と云ふのだそうです、澤山に御馳走になり、キユウ／＼と云ふ音楽をきゝました。

今日も亦面白う御座いました。

翌日は少し變つた方に行きました處細い／＼枝ですが先の方で何だか大變にいゝ香がして、ヂツとし

て居られません、のろ／＼と上つて行かうとすると、思ひ切りのばした角の先に、それはく痛いものが、あたります、ピリツとしました。大急ぎで殻の中に引込めましたから大したけがはありませんでしたが随分痛うございました。これはバラの木でした。もうこゝは厭になりました、今度は、上の方を見ると大變おいしそうな柿がよく熟して居るので、御馳走になりませうと思つて一日が／＼で、實の處に届きました。一番甘そうに熟して居る實のそばで、グツト軀をのばして、柿をなめました、もう少し／＼と思つてなめて居る中に、烏の勘さんが柿を見つけて、飛び下りて来ました。柿を食べるのかと思つて居ましたら、見なれぬ蝸牛を見つけて、自分の方に嘴をむけて居ます。もうびつくり仰天して大急で縮めました。勘さんは猶嘴を殻にさし込んで来ましたので出来るだけ首をちやめてブル／＼して居ましたらもう何も居ないと思つて殻を二三度つゝいただけで、よしたのでやつと命だけ助かりました。

もういゝ香やおいしそうな柿などにつられて食ひしんぼうすると、大しくじり、今日は失敗ばかりです、それでしばらくは出かけるのをやめて桐の木におとなしく居る事にしました。一一、一〇、一八、作